



届かなかった恋心

アン・マリー・ウィンストン

小池 桂 訳

届かなかった恋心

アン・マリー・ウィンストン 作

小池 桂 訳

Walk on the Wilde Side

by Anne Marie Winston

Copyright © 2002 by Harlequin Books S.A.

All rights reserved including the right of reproduction in whole or in part in any form. This edition is published by arrangement with Harlequin Enterprises II B.V./ S.à.r.l.

*All characters in this book are fictitious.
Any resemblance to actual persons, living or dead,
is purely coincidental.*

Published by Harlequin K.K., Tokyo, 2007

もしれない。

「あなたが帰ってきたなんて、信じられない！」リンディが言った。「もう二度とベル・ギャップの町には戻ってこないのかと思っていたわ」

「イーサン、あなたなの？ イーサン！」
 レンタカーのトランクから大きなダツフルバッグを取り出して肩にかけたイーサンは、その声に振り返った。誰だろうと思う間もなく、小柄な女性が勢いよく胸に飛び込んでくる。

とつさに両腕を広げて女性の体を抱き止めながら、イーサンは思わず一步後ろによろめいた。この香り……たちまち鼓動が速くなる。長いことひそかに思いを寄せていた相手、リンディ・メルトンだ！

彼女に会いたい一心で帰省したのだが、家に入る前にその彼女が胸に飛び込んでくるとは……。気まぐれで決めた帰省だったが、案外、悪くなかったのか

高校生のころにポニーテールにしていた髪をきっちり一つにまとめているものの、面影は変わっていない。眼鏡も紫色の大きな丸いフレームから小さな縁なしのものに替わっていたが、ゴールドとグリーンがさまざまな色合いを見せる目は昔のままだ。あいかわらずきれいな肌はすべすべした桃を思わせた。ほっそりと華奢きゃしゃな顔立ちのせいか、控えめでおとなしいと思われがちだが、顎のあたりには毅然きぜんとした雰囲気きぶんが漂ただよっていて、意志の強さをうかがわせる。

「リンディ」

家が隣同士のリンディ・メルトンは、幼稚園以来の幼なじみだった。しかし、中学に入って彼の反逆児ぶりが目立つようになったころから、リンディは

しだいに距離を置くようになった。それでも、目に余るほどひどい行動をとったときには忠告してくれたから、彼女のひとりで悪事を思いとどまったことも一度や二度ではない。とはいえ、イーサンの名字の“ウィルド”に“奔放な”という意味をひっかけた“ウィルド・マン”というあだ名のとおり、かなりはめをはずしたのは事実だ。

「会いたかったよ」

イーサンは込み上げる激情を抑え、慎重に言葉を選んだ。まず肝心なことを確かめなくてはならない。「挨拶代わりにキスをしたら、ご主人から猛烈なパンチが飛んでくるかな？」

リンディが顔をしかめた。「冗談はよして。結婚なんかしていないわ」

イーサンはリンディの肩に手をかけたまま顔をのぞき込み、礼儀正しく頬にさっとキスをした。リンディ——二カ月前、卒業十年目にして初めて高校の

同窓会が開かれるという案内を受け取って以来、頭のなかには彼女のことについていっぱいだった。それまでも、どうしているかとずっと気になっていたのだが、連絡を取る勇気はなかったのだ。

「同窓会に出るために帰ってきたのかい？」イーサンが尋ねた。腕のなかの彼女は相変わらずほっそりとしていて、たまらなく魅力的だ。高校のころはこんなふうに着る肩に手をかける機会すらなかったから、おそらく中学一年のときにバレンタインデーのダンス・パーティーで踊って以来だろうか？ それから六年前、母親の葬儀のときに、彼女のほうから抱き締めてくれた——二度も。

「今もこの家に住んでいるのよ」リンディは肩に置かれたイーサンの手をさりげなく振りほどくと、しきりにスカートに手をやりながら、ちらっと振り返って背後の家を示した。「町の図書館で司書をしているの」

「なるほど、司書か」イーサンはくすぐす笑いながらうなずいた。「いかにも君らしいな」

リンデイがむっとして口をとがらせる。「私ってそんなに退屈かしら？」

その声がわずかに震えている。イーサンは慌てて言い足した。「そういう意味で言ったんじゃないよ。君は僕の知るかぎり、いちばん聡明そうめいな女性だからね。高校時代もクラスの総代だっただろう？ 司書はほかの人の読書の楽しみを手伝う仕事なんだから、君がそういうかたちで人を助ける仕事に就いたのは、君らしいと思っただのさ」

リンデイの顔がぱつと輝いた。こぼれんばかりの笑みにイーサンの心臓は止まりそうになった。なんて美しいのだろう！ リンデイは派手な美人ではないが、その控えめなところがたまらず魅力的だ。昔から全然変わっていないし、それに引かれる自分も相変わらずらしい。イーサンは速くなった鼓動に気

づいて内心で苦笑した。

「まあ、うれしい。あなたに褒めてもらうなんて初めてだわ」

イーサンはわざと驚いた顔になった。「初めてじゃないよ。小学二年生のとき、学校からの帰り道に君が僕を追いかけながら転んで、膝小僧を擦りむいたことがあっただろう？ あのときだって、かさぶたがかっこいいと褒めたはずだよ」

リンデイが笑った。口元に小さなえくぼができて、きれいに並んだ白い歯がのぞく。「イーサン、戻ってきてくれて、本当にうれしいわ。だって、あなたみたいに愉快な人はいないもの」

愉快な人だって？ イーサンは心のなかで舌打ちをした。面白おかしいだけの存在とは、我ながら情けない。

「ところで、お父さんは元気かい？」イーサンは話題を変えた。リンデイは小さいときに母親を亡くし、

父親に育てられていた。ほとんどの同級生たちの父親より一まわり以上年齢が上で、厳格な印象だった。ふいにリンディの顔が曇った。「父は去年亡くなったの」

「それは……大変だったね。知らせてくれたらかけつけたのに」イーサンは思わずリンディの手を握った。彼も六年前に自動車事故で母親を亡くしていた。葬儀のためにベル・ギャップに帰省したのが最後に、リンディともそのときに会ったきりだ。当時、ブラジルにいてすぐに身動きがとれなかった彼のために、リンディは葬儀の手配を整えてくれた。そして、ベル・ギャップに到着すると今度は裏方にまわり、こまごまとした雑事をこなしてくれた。

「ありがとう」リンディがうなずく。「それにしても、お互いにずいぶん早く親を亡くしてしまっただね」

「ああ、そうだね」イーサンはしかたがないという

ふうに肩をすくめると、再び話題を変えた。「それはそうと、同窓会は楽しみだね。誰が町に戻っているんだい？」

たちまちリンディの顔がこわばった。「ええと……わからないわ」ぎこちない声になる。「私は出ないつもりだから」

「どうしてだい？」イーサンは思わずきいた。

「どうしてって……ただ……その……」リンディはついに観念したように顔を上げた。「つまり、こういうことよ。婚約者が私を捨てて、マンディ・ブリッグズと結婚したの。同窓会に出ても噂話の種にされるだけでしょう？　ひと晩じゅう、いやな思いをして過ごしたくないもの」

リンディが婚約していた。思いがけない言葉にイーサンは動揺した。しかし懸命に平静を装い、彼はきき返した。「マンディ・ブリッグズ？　チャリダーだった？　ブロンドで……その……Eカップの

かい？」

おどけた口調にリンディの口元がゆがんだ。「そうよ、あのマンディよ。サイズを比べられたらとても勝ちめはないわ」リンディは肩をすくめた。

女性の魅力はブラジャーのサイズで決まるとでも思っているのだろうか？

「それは違う。マンディ・ブリッグズより君のほうが十倍も魅力的だ」

リンディがいぶかるような目になった。「中学のころはそうは思っていないかったですよ？」

「男性を思春期のころの行動で判断しないでほしいな」イーサンが弁解した。「あの年ごろのもの基準は、頭よりもズボンのなかだからね。でも大人になると、本当の価値に気づくものなのさ」

リンディが苦笑する。「なるほど。つまり、自分は早々と思春期は卒業したと言いたいのかね？」彼女は車のなかにちらりと目をやった。「今回は一人で

来たの？」

「ああ。まだ独身なんだ」

「そう……それじゃあ、おかえりなさい」リンディはふとイーサンから目をそらした。

なんだか奥歯にもののがはさまったような言い方を考えているのだろうか？ ふたりは同窓会の話をしていたはずなのに……。そのとき、イーサンの頭にすばらしい考えがひらめいた。そうだ、この機会を逃す手はない。

そもそも、今回の帰省は同窓会に出るのが目的だった。おめあてはリンディだ。運がよければ、垣根越しにおしゃべりができるかもしれないが、それ以上は期待するまいと自分に言い聞かせてきた。それなのに家に入る前から彼女にでくわし、こんなふうな話が展開している。きっと運命なのだろう。人生の紆余曲折うよせつを目のあたりにしてきたイーサンは、偶然を軽んじる人間ではなかった。

「一緒に同窓会に出ないか？」彼はさりげなく切り出した。

リンデイが驚いたように目を見開く。「そんな……無理よ。あなただつて私となんか……」

「お願いだ」イーサンは、思わぬ言葉に戸惑うリンデイの手を握った。「卒業して十年もたつていると、誰が誰だかわからないかもしれないだろう？」

「ふざけないで、イーサン。お互いにまだ二十八歳よ。八十八歳じゃないんだから、すぐにわかるわ」

「でも君と一緒にいきたいんだ」イーサンは親指で、彼女の滑らかな手の甲をそつとなぞつた。

リンデイはまだ決めかねている様子だった。「考えておくわ」

イーサンがうなづく。満足のいく返事ではないが、これ以上強引に誘つてかえつてしり込みされても困る。「わかった」

「まだ家のなかにも入っていないのに、これ以上引

き止めたら悪いわね」リンデイはそつと手を引くと、一歩後ろに下がり、ふとそこで足を止めた。

一瞬、沈黙が流れる。イーサンが首をわずかにかしげ、促すようにリンデイを見た。

「よかつたら六時ごろ夕食に来ない？」やや早口になつたのは、気が変わらないうちに言おうとしたせいだろうか？「もし、ほかに予定がなければの話だけれど……」

“それじゃあ六時に”

リンディはチキンのマリネにハーブバターをまわしかけると再びオープンに入れ、大きく息をついた。二時間前、車から降り立つイーサン・ワイルドの姿を見た瞬間から、胸がどきどきして興奮が止まらないう。最初は日ごろの寂しさが募って幻でも見たのだからうと思っていた。しかし、信じられないことにそれは本物のイーサンだった。さらにうれしいことに、その彼が夕食にやってくる！

彼女は大きく深呼吸をして、気持ちを落ち着かせようとした。イーサンが同窓会に誘ってくれた。それも一度ならず、だ。もちろん、社交辞令なのはわ

かっている。しかし一瞬だが、リンディに関心のあるそぶりを見せたような気がした——思い過ごしだろうか？

イーサン……。リンディはグラスに白ワインを注ぐと、手に取って夢見心地な様子でもてあそんだ。異性を意識し始めたときから、幼なじみのイーサンは彼女の憧れ^{あこが}だった。しかし、ハンサムなイーサンはみんなの人気の的で、いつも女子生徒たちに囲まれていた。ちよつと不良っぽいところも魅力だったのかもしれない。まじめな勉強家だったリンディは、一度も振り向いてもらえないことなどなく、そのまま忘れ去られていった。高校に入るころには住む世界があまりにも違ってしまい、運がよければ、校舎の入り口で一瞬見かけるのがせいぜいだった。

あのころは、そんな瞬間が生きがいであったけれど……。

あれから十年が過ぎ、イーサンが戻ってきた。彼

の母親の葬儀のときを除けば、十年ぶりの帰郷だ。そのうえ、彼はまだ独身だという。きつとこれは運命なんだわ。

リンデイは婚約者に逃げられて以来、処女のままでは絶対に死なない」と固く心に誓っていた。たとえこの先、結婚を申し込んでくれる相手が現れなかつたとしても、処女のまま一生を終えるのだけはイヤだ。とはいえ、具体的な手段は思いつかないままだった。

卒業十年目を記念して同窓会が開かれるという通知を受け取ったとき、リンデイの頭に突拍子もない考えが浮かんだ。それ以来、ばかりかと思いいながら、心のどこかでひそかに期待していたのだ。

そして……ついに運命の女神はほほ笑んだ。目の前に差し出されたこの機会を、つかまない手はないだろう。イーサンは同窓会と一緒に行ってほしいと言ったが、それならイーサンにも私の頼みもきいて

もらわなくては。

処女を奪ってほしい……そう切り出す場面を想像して、リンデイの体は思わず震えた。

「僕に何をしてほしいって？」リンデイの家のベランダで手すりにもたれかかりながら、花が咲き乱れる庭を眺めていたイーサンは、彼女の唐突な言葉に思わず振り返った。

足をきちんとそろえ、両手を握り合わせたリンデイが、玄関のポーチに伸びた赤いつる薔薇ばらと同じくらい顔を真つ赤にしてベランダの中央に立っている。真剣なまなざしときっぱりした口調から、本気なのは明らかだった。「もう処女でいるのはイヤなの。だから、あなたにその手助けをしてほしいのよ」

イーサンは耳を疑った。まさかそんな……いや、たしかに彼女はそう言ったのだ。姿勢を正し、真顔で言ったところを見ると、処女であることも、これ

以上処女でいたくないことも本当なのだろう。男性本能がたちまち目を覚まし、下半身が熱く硬くなるのがわかった。しかしイーサンは、それを必死で無視して尋ねた。「どうしてだい？」

リンディが顔をしかめる。「どうして、ですって？ こんなことを頼まれて訳をきこうとする男性がいるかしら？」

イーサンはリンディのそばに行つて言った。「ああ、いるね。話してほしいな」

リンディはすねたように口をとがらせた。夕方に立ち話をしたときも、同じようなしぐさをしていた。ふつくらとしたあの下唇を、舌でなぞつたらどんな感じがするだろう？ 想像するだけでときどきしてくる。

「わかったわ」リンディが一步後ろに下がり、小さなガラスのテーブルの横をすり抜けた。「そうよね。私は欲望の対象になるタイプじゃないもの」顔を背

け、声もほとんど聞き取れなかった。

「そういうことじゃ……」

「でも、本当のことだわ」リンディの声が痛烈に響いた。「だって、高校のころ、あなたは私の存在に気づいてすらいなかったでしょう？」

イーサンは思わず啞然^{あぜん}としてその場に立ち尽くした。高校時代、僕が彼女の存在を無視したとでも？ いったい、彼女はどこまでわかっているのだろうか？ さんざん、気を引こうとしたつもりだったのに、リンディはわき目も振らずに勉強ばかりしていた。だから、無視されたのはこっちのほうなのだ。「無理もないわ」リンディはさつきよりも少し穏やかな声で言った。「だって、美人じゃないもの。だから困っているのよ」彼女は両手でしきりにスカート^{つば}のひだをもてあそんでいたが、やがてごくりと唾^{つば}をのむと、決心したように顔を上げた。「私は二十八歳でまだ処女だわ。これまで一度だけ、結婚をす

るチャンスがあつたのに、それも途中でだめになつてしまった。でも、セックスを知らずに、このまま一生を終えるのはいやなの」

どう答えるべきか、イーサンの頭にはとっさには思い浮かばなかつた。彼女に以前からずつと欲望を抱いていて、ベッドをともにすると想像しただけで、セックスのことしか頭にない高校生さながら体が熱くなつてくるなどと本心を打ち明けたら、リンディはからかわれたと思つて口もきいてくれなくなるだろう。本気で言っているのはわかるが、やはり、とても信じられない。派手で軽薄なマンディ・ブリッグズと違い、リンディには控えめな美しさがある。それなのに本人は、「自分が美人ではない」と思い込んでいるのだ。聡明さうめいなはずの彼女がどうして……とても信じられない！

「リンディ、本当にそんなことをしていいのかい？」イーサンは言葉を選んで言つた。「いつか理

想の男性に出会つたときに、後悔するかもしれないよ。よく考えたほうがいいんじゃないかな？」

「つまり返事は、ノー」なのね」ゴールドの混じつたグリーン目の目にもみるみる涙が込み上げ、あふれる涙が頬を伝い始めた。「いいのよ、イーサン。今の話はきつぱり忘れてちようだい。決まり悪い思いをさせて悪かつたわ」リンディが手すりをぎゅつと握り締めながら顔を背ける。

信じがたい話だが、よほど深刻に悩んでいるのだろう。

イーサンは背後からリンディの細い肩に手をかけ、こわばつた肩をそつと両手でほぐしながら耳元でささやいた。「もし君が本当にそれを望むのなら、喜んで君の最初の男性になりたいよ」その言葉を口にしただけで、イーサンは込み上げる欲望に思わず武者震いをした。今からこんなふうだと、この腕に裸の彼女を抱いたときには、いつたいていどうなつてしま

うのだろうか？

リンデイが体をこわばらせた。「本当にいいの？いやなら断つてくれてかまわないのよ。気にしないから」

「いやなら、だつて？」イーサンの声には、信じられないという響きがあつた。彼はリンデイの肩に置いた手を腕に滑らせ、華奢きゃしゃな手に重ねた。手すりから手をはずして体の向きを変えさせ、向かい合う姿勢になる。それから、自分の肩にリンデイの手を置かせ、そつと体を引き寄せた。イーサンは硬くなつた男性が、彼女の太腿の交わるあたりに押しつけられていく。かなうとは思つてもみなかつた夢が、現実になろうとしている。イーサンは高まる期待に、目を閉じて大きく深呼吸した。「これがいやがつている男の反応だと思ふかい？」イーサンの声はかすれた。

「ああ……」リンデイの目がふいに大きく見開かれ

た。「なんてこと！」

イーサンは懸命に自分を抑えながら、くすくす笑つた。なんてうぶなのだろう。この年になるまでこんなに無垢むくでいられたこと自体、信じられない。イーサンはリンデイの顔からおもむろに眼鏡をはずし、傍らのテーブルに置いた。「それじゃあ、キスをするよ」彼は顔を近づけながらそつとささやいた。

「ええ、いいわ」リンデイが目をぎゅつと閉じて顔を上げる。

イーサンは胸はふいに熱くなり、いとおしさが込み上げてきた。唇を近づけると、小さな貝のイヤリングにふと目を引かれた。そのまま彼は耳元に唇をそつと押しあて、何度もキスをした。柔らかい耳たぶを口に含んだり、そつと嚙かんだりしながらもてあそぶとやがて彼女の両手が首の後ろにまわされてきた。

イーサンはリンデイの体をさらに強く引き寄せ、

耳たぶから頬へと唇を這はわせた。「君にキスをしたらどんな味がするだろうって、何年も考えていたんだ」彼はキスの合間にささやいた。顎の下を軽く噛むとリンディの体がわずかに震える。「こんなふうにな」

彼女は喉の奥からくぐもった声をもらし、イーサンの髪に指を絡めた。彼はようやく唇に唇を重ねると、舌の先で形のいい輪郭をなぞり、わずかに開いた唇の間から巧みになかに滑り込ませた。甘美なキスがたちまち濃厚なキスに代わり、舌がいつきに奥まで入っていく。

膝から力が抜けたのか、リンディがたちまちイーサンに身を任せた。イーサンは勝ち誇ったような優越感を覚えた。

リンディがもうすぐ自分のものになる。背中に滑らせていた手のひらをゆっくりと手前に持つてくると、イーサンは胸のふくらみを包み込ん

だ。

リンディがあつと小さな声をあげ、慌てて後ずさりする。大きく見開いた目のゴールドとグリーンは濃さを増し、黒に近くなっていた。

いけない！ 先を急ぎすぎた。イーサンは自分を叱しかつた。

「ごめんなさい……逃げたわけじゃないの」リンディが口ごもりながら再び体を近づけてくる。「ちょっとびっくりしただけ」

イーサンはせつぱつまった欲望を必死でこらえながら、思わず苦笑した。ズボンのなかでは、硬くなつた体が欲望を満たしたいと激しく求めている。ここで手を放すのは苦痛に近いが、とにかく我慢するしかない。「今夜はベッドに誘わないよ」くぐもつたかすれ声はまるで他人の声のようだった。自分に言い聞かせているのか、リンディに向かって言っているのか、イーサンは自分でもよくわからなかった。

「そう……なの？」リンディの声に失望がにじむ。キスのせいで赤みを増した唇と陶然とした表情から、リンディもイーサンを欲しがっているのは明らかだった。

それはイーサンも同じだった。彼はリンディの体に触れてしまわないように、わざと両手を拳こぶしにした。「ああ、今夜はよそう。急ぐつもりはないんだ。女性にとって、初めてのときは特別な時間であるべきだ。いつまでも思い出に残るようなものにしよう。高校生じゃないんだから、車の後部座席なんて論外だよ」イーサンはそこで苦笑した。

リンディはわずかにほほ笑んだものの、まだ夢見心地らしかった。唇を半ば開いたまま、舌先で上唇をなぞっている。おそらく本人は無意識にしているのだろうが、たまらなくセクシーだ。「それじゃあ……いつなら？」

イーサンは首を横に振った。「タイミングは僕に

任せて」彼は我慢できず、リンディの小さな鼻先にキスをした。「そのときがきたら、君にもわかるよ」

3

翌日、リンデイはいつものように仕事をこなしたが、内心ではうわの空だった。夢見心地で、まるで雲の上を歩いているみたいだ。

イーサンが町に帰ってきただけでなく、同窓会と一緒に行くかと誘われ、そのうえ彼と——いいえ、ふたりはというべきだろうか——愛をかわすことになつたのだ。正確にいえば、「愛をかわす」わけではない。イーサンがセックスを教えてくれるだけで、愛とは無関係だけれど。

それを思うと、期待と幸福に膨らむ胸がしゅんとしぼんでしまいそうになる。

くよくよしないで！ リンデイは自分に言い聞か

せた。昨日までは、オールドミスの司書として一生を終えるつもりでいたはずでしょう？ でも、昨日までは、イーサンが二度とこの町に戻ってこないと思つていた。だから、あきらめられたのだ。これまで好きな男性が現れなかったのも、誰も好きになりたくなかつたからだ。

イーサンがいたから……。リンデイは自分の気持ちに気づいて愕然がくぜんとした。いや、本当は気づいていたのに、これまで見て見ぬふりをしてきたのだからか？ もし彼がこの町に戻ってこなかつたら、一生独身でいることを気にもしなかつただろう。しかし、一時的にせよ彼が戻ってきた今、リンデイの胸はときめき、結婚への願望が頭をもたげていた。

「リンデイ、お客さまよ」来年度の児童図書部門の購入希望リストに目を通していると、いちばん年下のアシスタントがオフィスのドアを開けて顔をのぞかせた。「すぐくセクシーな男性なの！」

リンディの鼓動が速くなった。しかし、口を開く間もなく、ドアの向こうから彼女の名前を大声で呼ぶ声が聞こえてきた。図書館には場違いな男性の悲鳴だ。

「リンディ、助けてくれ！　ここから出してくれよ！」

リンディは慌てて立ち上がった。オフィスを出て声のした方へ急ぐ。すると、イーサンがお仕置きされた子供のように両手を前で組みながら、貸し出しカウンターの前に立っているのが目に入った。その前でフローラ・ギディングスが立てた人差し指をしきりに振り、怖い顔でお説教をしている。

「図書館に入ってきた瞬間に、『ワイルド・マン』だってわかったのよ。昔、うちの庭からしょっちゅうトマトを盗んでいたわね。もう改心したの？　また盗む気なら、今度こそ容赦しないわよ！」

イーサンの口元がわずかにゆがみ、えくぼが浮か

んだ。彼はブルーの目をいたずらっぽく輝かせ、はにかむようにフローラ・ギディングズを見つめた。うなずくたびに、やや長めのブロンドの髪がきらきらと輝き、天使の輪が浮かぶのがわかる。ああ、彼は天使だわ！

「ミス・ギディングズ。すっかり心を入れ替えたつもりだったのに、トマトの話を聞いたらなんだかまた誘惑に負けそうな気がしてきましたよ。だって、お宅のトマトはベル・ギャップの町でいちばんおいしいんだから」

イーサンの巧みな会話が続いた。驚いたことに、気むずかし屋のフローラ・ギディングズがいつのまにか上機嫌になって、そのうち「トマトをあげるから今度うちに寄ってちょうだい」とまで言い出してしまった。

リンディは半ば呆^{あき}れて首を横に振った。その気配に気づいたのか、イーサンが顔をこちらに向けた。

二人の目が合い、視線が絡み合う。急に図書館が狭く感じられ、リンディは息苦しさすら覚えた。着ている服が窮屈に思え、肌がひりひりしてきた。

「リンディ」イーサンが腕時計をちらっと見て、声をかけた。「家まで送っていいこうと思つて寄つたんだ」

壁の時計に目をやったリンディの口から、思わず安堵あんどの息がもれそうになった。午後八時——ようやく閉館の時間だわ。図書館が遅くまで開いている火曜日と木曜日は、永遠に続くかと思うほど一日が長いのだ。

「家まで送っていいこうと思つて寄つたんだ」

イーサンの言葉の意味にようやく気づき、リンディはぱつと顔を輝かせた。わざわざ迎えに来てくれたんだわ！「すぐ支度をするわ」

五分後、図書館のドアに鍵かぎをかけたリンディは、顔を上げてイーサンにほほ笑みかけた。

「わざわざ迎えに来てくれてありがとう」

イーサンが手を握る。リンディは体の芯しんが熱くなつた。大きな手はざらざらとしていて節くれ立ち、まさに男性の手だ。「夜道の一人歩きは危ないからね」

リンディは声をあげて笑つた。もちろん、氣遣つてもらつたことには胸が躍る。「もう何年も、帰り道は一人なのよ」

「そうかもしれない。でも、今は僕がいるんだから、一人で帰ることはないよ」

「イーサン、ここはベル・ギャップよ。まだ十分安全なの。今でも、玄関のポーチに腰かけてのんびりできるんだもの」

「そうだったね。なにしろ、人を見ても警戒しなくていい場所は久しぶりだから、つい……」

「そうなの？」イーサンはどこで何をしていたのだろうか？ リンディは好奇心にかられて尋ねた。「こ

れまでどうしていたの？ 誰もあなたの消息を知らなかったのよ」

イーサンが歩調をゆるめた。「ここを出て、まずブラジルに行った。一年半、そこにあるダイヤモンド鉱山で働いたんだ」

「見つけたの？」

イーサンが振り返ってにやりと笑った。「ああ、少しね」

「少しって？」 思わせぶりの答えを聞き、リンデイが問い返した。

「自分で鉱山が買えるくらいかな？ 去年、それを売却してかなり儲けたんだ」

リンデイは足を止めた。「本当に？ それじゃあ……あなたって……」

「ああ、大金持ちさ」 イーサンが苦笑する。「この町じゅうの家を全部買い占めても、まだお釣りをもらえるくらいの財力はあるかな」

リンデイが軽く咳払いせきばらをした。「それだけ出世したら、さぞこの町がちっぽけに見えるでしょうね」

「そんなことはない」 イーサンが急に真顔になってリンデイを見た。「ここはまるで天国さ。ダイヤモンド鉱山では人間なんて虫けら同然だった。事故はしょっちゅう起きるし、喧嘩けんかは日常茶飯事で、殺人も珍しくないんだ」

平然とした口調にリンデイはぞつとした。

「それに比べたらニューヨークはまだ安全だが、お互いに助け合うこともなければ、近所づき合いもない。もし通りで強盗にあっても、居合わせた人の半分は、わざと知らんぷりをして通り過ぎるだろう」

「じゃあ、今はニューヨークに住んでいるの？」 一度だけ、リンデイもニューヨークに行ったことがある。高校のブラスバンド部が感謝祭のパレード行進に参加したときのことだ。

「ああ」 イーサンがうなずいた。「もう七年になる

よ。ダイヤモンドの輸入会社を経営しているんだ」

ダイヤモンドの輸入ですって？ イーサンはダイヤモンドの輸入で生計を立てている……いいえ、違うわ、彼はもう十分にお金持ちなのだから、今はそれを道楽でしているのだろう。リンディは、急にイーサンが遠い世界の住人になってしまったことに気づいた。彼がつき合うような、洗練された美女たちにはとても太刀打ちできない。そう思うと、ついさつきまでの高揚していた気分がたちまち吹き飛び、ひどく気分が落ち込んできた。

リンディの気持ちを察したのか、イーサンが言った。「もう何年も、君のことを考えていたんだよ」

リンディは疑わしそうに彼を見た。「私のことをも？」

「ああ、君のことをだ」イーサンはつないだ手を上に持ち上げ、指の関節に唇を押しあてた。

どういう意味だろう？ リンディにはそれ以上聞

いただす気力は出なかった。いずれにせよ、私が期待しているような褒め言葉が聞けるわけではないだろう……。

二人が通りを歩き出すと、予想していたとおりイーサンはいたるところでかつての仲間や喧嘩相手から声をかけられ、ふたりはなかなか先に進めなかった。

「ワイルド・マンじゃないか！」リンディは何人の人がそう叫ぶのを聞き、かけ寄ってきて立ち話を始めるのを見たことだろう。

「電信柱に上ったまま三日間過ごせるかっていう賭をして、おまえは本当にやってみせたんだよな」

「トルイットのやつが、例の野球のバットを思いきり振ったときのことを覚えているかい？ 運よく頭を引っ込めたからよかったものの、そうじゃなかったら、今ごろはとっくにあの世行きだったさ」

「クリシー・レスティンを覚えているかい？ 今ば

ったり会つてもきつとわからないと思うよ。なにしろ、五人の子持ちなんだ。信じられないだろう？」

二人は何度も呼び止められながら通りを歩いていった。やがて家並みが切れ、櫛かじの木立が続くようになった。街灯の明かりは巨木に遮られ、二人の影が黒く浮かび上がっている。

「ほらね。この町はあまり変わっていないのよ。インターネットは入ってきたけれど、クリスマスにはあいかかわらず、大通りでキリストの誕生劇をやっているわ」

「いいね」イーサンがリンディに向き直り、腰に両手を添えた。「リンディ、僕はたしかに名声を得たかもしれないが、中身は変わっていないんだ。昔のままの、ワイルド・マン“さ”」

「イーサン」リンディは息せき切った声を出した。「なんだい？」イーサンは彼女の腰に手を添えたまま、向きを変えて歩き始めた。

「私にとって、あなたはずっと“イーサン”のままよ」

次の瞬間、後ろ向きに歩いていたらリンディの体は、太い木の幹に押しつけられて止まった。

そのまま、イーサンの体が覆いかぶさるように押しつけられてくる。リンディは木の幹とたくましい肉体の間にはさまれるかっこうになった。腰に添えられていた手が上に伸び、髪からピンを一本ずつ抜いていく。やがて、きつちりシニヨンにまとめられていた髪がうねるようにはね上がり、肩から腕へと広がった。彼は再びリンディの腰に手を持っていき、今度はやや力を込めて引き寄せた。

「一日じゅう、ずっとこのことばかり考えていたんだ」イーサンの声が低く響いた。甘いささやきが頬をくすぐる。「キスをしたら、また昨夜ゆうべみたいに喉の奥からあの声を出してくれるだろうかってね」

イーサンの唇を重ねられると、リンディは何も考

えられなくなった。舌が滑り込んでくると、彼女はイーサンのたくましい肩にしがみついた。いつのまにか、サンダルのなかで爪先がきゅっと丸まっている。

熱いキスをかわしながらも、イーサンの両手はリンディの腰をつかんだままだった。リンディはじれったさに体がうずいていた。胸のふくらみにさわってほしい。込み上げる欲望で、その頂はちくちくしている。昨夜のように、今夜もイーサンは私の胸に触れてくれるだろうか？

リンディはあえぎながら唇を離した。「さわっても……いいのよ」

イーサンがキスをやめ、低い声でささやく。「今だってさわっているよ」

「そうじゃなくて……」リンディが腰に置かれた手を軽く撫なでて促す。「昨夜、さわったところよ」

しかし、彼は手を腰から動かしはしなかった。

「どこだったかな？」手でそっとリンディの手に触れながらきく。「教えてくれるかい？」

イーサンはリンデイの顔をのぞき込んだ。思わせぶりな台詞が過激すぎたらしく、呆然としたまま顔をこわばらせている。しかし、次の瞬間、言葉の意味を理解したのか、彼女はおもむろに木の幹に頭をもたせかけ、目を閉じた。イーサンの口元がわずかにほころんだ。二十八歳の聡明な女性が、これほど男性経験に乏しいとは……とても信じられない。この町の男性は、女性を見る目がないのだろうか？

リンデイの手が、重なったふたりの手をゆっくり上に導いていく。イーサンはやや上向きの顔をじっと見つめた。まぶたが小刻みに震え、ふっくらした唇がわずかに開いている。浅い呼吸に合わせて胸の

ふくらみがしきりに上下するのがわかった。このまま思いきり抱き寄せたいが、今、大切なのは彼女に安心感を与えることだ。信頼してもらわなくては。

リンデイはイーサンの手を胸のあたりまで持つてくると、ふたりの体の間に滑り込ませ、胸のふくらみの上にゆつくりと手のひらを置かせた。

ふたりの口から思わずため息がもれ、緊張していたリンデイの体がふつと柔らかくなるのがわかった。「ここをさわってほしいのかい？」イーサンはふくらみを手のひらで軽く愛撫しながら、親指でふくらみの先をこすった。

リンデイがはっと息を吸い込む。「ええ」

彼はもう一方の手も滑り込ませて愛撫を続けながら、巧みにブラウスのボタンをはずした。人気のない通りの暗がりだから誰にも見られる心配はない。スカートからブラウスを引き出して大きく前を開けると、飾りのない白いブラジャーが目飛び込んで

きた。「ああ、なんてかわいいんだ」イーサンはささやいた。「僕が今、何をしたいかわかるかい？」

「何って……」

「ここにキスをしたいんだ」イーサンはブラジャーのなかに両手を滑り込ませて胸のふくらみを包み込んだ。リンディの喉の奥から思わず吐息がもれる。大きな手のひらにすっぽり収まったふくらみは、小ぶりだが張りがあつて引き締まつている。しかしリンディは、再び体をこわばらせた。イーサンは昨日の会話を思い出した。胸が小さいことを気にしているに違いない。

イーサンはリンディの唇に軽くキスをすると、耳元でささやいた。

「なんてきれいなんだ」顎から喉元へ唇を這わせるはと、リンディがごとりと唾をのみ込むのがわかった。「いいえ、そんなことはないわ」リンディが小声で言った。「だって……私の胸は小さいもの」

喉元に押しあてた唇が思わずゆがんだ。僕が笑つたのにリンディは気づいただろうか？ イーサンは胸のふくらみを両手ですくい上げてみせた。「胸が小さいだって？ ほら、違うだろう？」彼はさらに唇を下に這わせ、胸の谷間で止めてささやいた。「左からがいいかい？ それとも右？ どっちがいい？」

リンディがくすくす笑つた。「究極の選択ね」かすれた声でそう言い、華奢な手でイーサンきんしやの右の頬をそつと押し顔の向きを変えさせた。イーサンきんしやの唇は左のふくらみを目指してゆっくり進み始め、やがてふくらみの先をとらえた。

硬くなった蓄つぼみを舌ではじいたり、唇に絡めたりしながらもあそぶ。リンディは両手でイーサンきんしやの髪をまさぐりながら大きく体を弓なりにそらせた。

ああ、彼女が欲しい。狂おしいまでの欲望に圧倒され、大木の陰に彼女を引きずり込んでしまいたい

衝動が込み上げてきた。だが、それはだめだ！ イーサンははつと我に返った。女性にとつて、初めての体験はいつまでも思い出に残る大切なものだ。ふたりだけの親密な場所ではなくてはならないだろう。リンデイが緊張を解いて自制心を捨て、まじめな顔の奥に隠れている奔放な女の姿を見せることのできる場所であれば。

イーサンは未練たつぷりに唇を離した。ズボンのなかで硬くなっているものを少しずらして楽にする。それからブラジャーをもとに戻し、ブラウスのボタンを留めた。はだけた裾すそはあえてスカートの中になかに戻さなかった。髪を下ろしていれば、誰も気づかないだろう。

リンデイが目を開けた。薄暗がりに浮かび上がる大きな目には、欲望が色濃く浮かんでいる。「やめなくてもよかったのに」

「いや、これでいいんだ」イーサンはきつぱりと言

った。「さもないと、木に押しつけたまま、君のバジンを奪ってしまうだろうから」

リンデイの顔にびっくりしたような表情が浮かんだ。

「さあ、行こう」イーサンが再びリンデイの手をつなぐ。「古い映画でも観みて、いちゃつこう」

私を口説こうとしているんだわ。そうじゃなかったら、こんなことはしないもの。水曜日の朝、図書館にフリージアの大きな花束が届けられたとき、リンデイは心のなかでつぶやいた。甘い香りの花束には小さなカードが添えてあり、「花のような君へ」とだけ書かれている。

閉館間際、イーサンがまたふらりと入ってきた。

受付デスクにいたリンデイは普段と変わらぬ態度を装いながら、周囲に気づかれないようにわずかにほほ笑みかけた。「今朝はお花をありがとう」昨夜、

ふたりはポップコーンを食べながら映画を観て、そのあとイーサンの仕事について話した。ひそかに熱いキスを期待していたのだが、彼は驚くほど紳士的で、十一時になると玄関で最後のキスをしてくれただけでおとなしく帰ってしまった。

「どういたしまして」あつと思う隙もなくイーサンが彼女の顎に手をかけ、身を乗り出して軽く唇にキスをした。

近くにいた司書の一人がくすくす笑った。リンディはイーサンに「あとから話があるわ」という意味を込めた目配せをすると、閉館時間の五時になったことを館内に告げてまわり、最後に残っていた人を外に出して入り口のドアに鍵をかけた。それから荷物をもとめ、職員専用の通用口に向かう同僚たちに「それじゃあ、また明日ね」と声をかけて見送る。

互いに挨拶をかわしながら皆が出ていくと、リンディはさつきから辛抱強く後ろで待っていたイーサ

ンに向き直った。

「いったい今のは、なんのつもり？」

「今のは、っていうと？」詰問する口調にもイーサンは、どこ吹く風という顔をしている。高校時代、教職員の談話室においてあった冷水器におたまじゃくしを入れただろうと校長にとがめられたときも、たしかこの表情でごまかしていた。

「わかっているくせに」リンディは顔をしかめた。

「さつきのキスよ」

「短すぎたね」イーサンがすかさず言った。「やり直そうか？ 今度は三倍の長さにするよ」

「ここじゃだめよ」リンディが慌てて警告した。

「どうしてだい？」

「だって、そんなことをしたら、明日町じゅうの噂になっちゃうもの」

「リンディ……」イーサンは半ば呆れたような声になった。「誰だってキスぐらいするよ。噂になんか

ならないさ」

「でも、私がキスをするところは誰も見たことがないのよ」ひそかに思い続けてきた相手なのに、どうしてキスしたくないなんて言うの？ 我ながらどうかしている！

「わかったよ」イーサンがうなずいた。「それじゃあ、手をつないでもいいかい？」

リンディはため息をついた。「ええ、もちろん」「つまり、人前で手をつないだことはあるんだね？」イーサンは指を絡めながら歩き出した。

「ないわ。でもキスをするのと手をつなぐのはまったく別なもの」

イーサンがいぶかしげな顔になった。「手もつないだことがないって……婚約していたんだらう？」
「ええ」リンディはしかたなさそうにうなずいた。
できれば触れたくない話題だが、イーサンのことだから、話を聞き出すまではあきらめないだらう。

「彼はアイラ・モリスといって、牧師だったの。五年前に、長老教会のクイン牧師が引退なさったあとにフィラデルフィアから赴任してきたのよ」

「牧師か……」
「笑ったらぶつわよ」

イーサンは顎に手をやり、口元がゆがんでいるのを見られないようにした。「笑ってなんかいないよ。本当さ。だから続きを聞かせてくれないか？」

「二年間つき合つて、結婚を申し込まれたの」
「でも、リンディ」イーサンが言った。「二年間もつき合つていて、一度もセックスをしなかったのかい？ 彼は正常な男だったのかい？」

「私も、何度もそれを考えたわ」リンディがため息をついた。「きつと私に……というより、私の肉体には興味がなかったのね。でも、牧師の妻としては理想的だと思ったのかもしれない」
「つまり、彼は君のことをあまり知らなかったんだ

な」

「そんなことを言われて憤慨すべきなのだろうが、なぜか悪い気はしなかった。むしろ、リンディは心が温かくなる気がした。「結婚式が一年後と決まり、式まで三カ月くらいのある日、事前に連絡をせずに彼のアパートメントに行ったら彼がマンディとベッドにいとところを目撃してしまったの」イーサンに対してこんなふうに淡々と話せるなんて、自分でも不思議な気がする。「でも、なぜかふたりがとてまばかばかしく見えたわ。彼は痩せていて、私より五センチ背が高いだけなの。それに比べてマンディ・ブリッグズは……なにしろEカップで大柄でしょう？」

「僕より小さい男じゃ、殴るわけにもいかないな」その声には、ふざけるような響きはみじんもなかった。リンディは驚いて顔を上げた。イーサンが苦虫を噛みつぶしたような不機嫌な表情になっている。

「ええ、でも、気持ちはいわ」リンディは明るい声でそう言うと、もう一方の手をイーサンの腕に置いた。指先に触れる腕は、まだ筋肉がこわばっている。「イーサン、もう三年前の話よ。すっかり過去のことだわ」

「だがそいつは君を傷つけた」うなるような声には残忍な響きがにじんでいる。

「ちよつとの間だけよ」リンディが言った。「私も彼を心から愛してはいなかったんだと思うわ。だって、愛していたら今でも心が痛むはずでしょう？今は、マンディが彼の面倒を見てくれることに感謝さえしているの」リンディは指先で軽くイーサンの腕をさすった。「もう彼の話はやめましょう。どうでもいい男性だもの」

ふたりは黙って歩き続けた。イーサンは何か考え込んでいるらしく、重苦しい雰囲気か漂っていた。昨夜の帰り道はあんなに胸がときめき、彼の近くに

いると感じられたのに……。今夜はふたりでいるのに、寂しさすら感じる。

家の前まで来ると、イーサンはゆっくり足を止めた。リンデイはいつもと違う様子のイーサンにどうこた応えていいかわからないまま、無言で顔を上げた。

「リンデイ」

「イーサン」リンデイはわざと明るくほほ笑んだ。

「君を傷つけたくない」

リンデイは驚いて首を横に振った。「傷つけてなんかいらないわ」

「僕はこの町にとどまるわけにはいかないんだ。わかつているだろうか？」

「あなたがこの町にとどまるだなんて、考えてみたこともないわ」それは本当だった。月曜日に、車から降り立ったイーサンの姿を見たときから、リンデイにははつきりとわかつていた。しかし、彼がここにいる間は、そのことは考えないつもりでいたのだ。

泣くのは彼が去ってからでいい。時間は一生分、たつぷりある。

「君が欲しい」イーサンはリンデイがこちらを向くようにさせ、引き寄せた。

「わかつているわ」リンデイが両手でイーサンの頬をささむ。「キスして」

「家のなかに入ろう」イーサンの声がかすれていた。「なかでキスをしてあげるよ」彼はそこで深呼吸をした。たくましい胸が大きく上下する。「リンデイ、今夜はキスでおしまいじゃないよ」

5

イーサンがリンディを抱き上げ、唇を重ねた。彼女は胸を躍らせながら両腕を肩にまわし、熱いキスに応えた。リンディが手探りで家の門の掛け金はずす気配が伝わってくる。門が開くと、イーサンはそのまま玄関まで行き、ドアの前でおもむろに彼女の体を下ろした。

唇を熱く重ねたまま、彼はポケットに手を突っ込んだ。そして家の鍵を取り出すと、未練たっぷり唇を離して言った。「ごめん、鍵を開けないと……」「いいのよ。それに、女性を抱いたまま家のなかに入るのは縁起が悪いかもしれないし……花嫁じゃないんだもの」リンディは思わずそう口にしてしまっ

て、たちまち後悔した。まるで結婚をあせっている女性の台詞みたい!

しかしイーサンは気づかない様子だった。彼はドアを開けて彼女をなかに促すと、先に立つて歩きながら次々と明かりのスイッチを入れた。

イーサンのあとについてリンディも家のなかに入った。家はイーサンの母親が生きていたころとあまり変わっていないが、どこかわびしい雰囲気が出ている。彼が人に頼んで定期的に掃除をしてもらっているのは知っていたが、家のなかには、どこか家族の帰りを待ちわびているような物悲しさが漂っていた。

イーサンは台所に入っていく、戸棚から二個のワイングラスを取り出した。冷蔵庫を開け、シャンペンを出すと、それを手に再び廊下を歩いていく。

「シャンペン？」リンディが言った。「何かお祝いごとでもあるの？」

「そう言つてもいいんじゃないかな？」イーサンは自分の部屋の前で足を止めた。彼が家を出てからは客用の寝室として使われていたはずだが、やはり今でもこの部屋がいちばん落ち着くのだろう。

ドアを開けてリンディをなかに促しながら、入り口のすぐそばにある明かりのスイッチを入れる。次の瞬間、リンディはあつと息をのんだ。部屋のいたるところに花が飾られている。

彼はシャンペンとグラスをテーブルの上に置くと、部屋のあちこちに置いたろうそくに一つ一つ火をともしていった。それからリンディのそばまで戻ってきて部屋の明かりを消すと、ろうそくの優しい炎がふたりを照らし出した。

リンディは目頭が熱くなつた。今まで待つていてよかつた。女性にとつて、やはり初めてのときは特別でなくてはならない。「ああ、イーサン……」リンディは声にならない声でささやいた。「ありがと

う」

「まだ何もしていないよ」イーサンがにやりと笑つてリンディの手を取ると、腕でかかえるように抱き寄せた。「服を脱ごうか」

「あなたもね」リンディの膝から力が抜けていく。リンディは前にボタンをついたシンプルなドレスを着ていた。イーサンがすばやくボタンをはずし、ドレスを肩から脱がせると、リンディはブラジャーとパンティだけの姿になつた。彼は眼鏡に手を伸ばしてそつとはずし、ドレッサーの上に置いた。

リンディは両腕で胸元を隠したい気持ちを抑え、イーサンのワイシャツのボタンをはずそうとおもむろに手を伸ばした。下の二、三個をはずして裾すそをズボンから引き出した拍子に、手の甲が彼のみぞおちのあたりに触れた。イーサンがはつと息をのむ。「手伝おうか？」

すばやくワイシャツとズボンを脱ぎ、イーサンは

たちまち下着一枚の姿になった。素肌にぴったりした紺色の下着の上からでも、彼がすでに硬くなっているのがはつきりと見て取れる。

リンデイの呼吸が浅くなつた。体が熱くなるのがわかる。彼に引き寄せられると、リンデイはたくましい胸板に頬をぴったりとつけ、しっかりとイーサンの腕のなかに収まつた。髪に手がかかり、ピンがはずされていく。やがて豊かな髪がうねるようにしてほどこけた。それからしばらくの間、イーサンは大きな手で背中をそつと撫でながら、無言でリンデイの体をただ抱き締めていてくれた。

どのくらいの時間、そうしていただろう。じれつたさに耐えきれなくなつたリンデイが少し顔を上げ、彼の喉元に鼻先をこすりつけながら、脈打つ場所にそつと舌で触れた。イーサンの喉からうめき声もれ、たちまち片手でブラジャーのホックがはずされた。彼は一歩下がってそれを床に投げ捨て、ひざま

ずいてパンティを取り去つた。

リンデイは体を硬くした。イーサンが、さつきまですでパンティで覆われていた場所をじつと見つめている……。茂みに熱い息がかかると、リンデイの体はびくつと震えた。イーサンを立ち上がらせようと肩に手をかけた瞬間、彼は身を乗り出してひめやかな場所に唇をつけた。「イーサン……」あまりの衝撃に、リンデイは彼の体を離そうとしていたことも忘れ、思わずあえいだ。

「大丈夫だよ」熱いささやきが愛撫あいぶとなつて茂みをくすぐる。両手が太腿の間に滑り込んできて、隙間すきまをわずかに押し広げようとした。リンデイが脚を開くと、唇はさらに奥へと分け入り、欲望に打ち震える小さな蓄つぼみを探りあてた。

「ああ……」リンデイは思わず彼の肩を強くつかんだ。イーサンがますますむさぼるように唇を動かし、やがて熱い舌が蓄をもてあそび始めると、彼女は両

手を彼の髪に差し入れて手前に引き寄せた。イーサンの舌が、こんなふう^{よほど}に私に歎びを与えてくれるなんて……。

リンディの口から悲鳴とも吐息ともつかない声もれる。イーサンがすかさず唇を離して立ち上がり、彼女を楽々と抱き上げてベッドに運んだ。すでにカバーはめくつてある。イーサンは、まるでガラス細工を置くかのようにそつとリンディの体をシーツの上に横たえた。ベッドの傍らに立ち、下着の端に親指をかけていつきに下ろす。

リンディの目は大きくて硬いものに釘付け^{くぎ}になった。そして無意識のうちに両手を伸ばし、すべすべしたものを手のひらで包み込んでいた。うめき声が聞こえ、イーサンがリンディに手を重ねる。「こうだ」

彼はそうささやくと添えた手をリズムカルに動かし始めたが、リンディが同じようにするやいなや、

すぐに手首をつかんで彼女の動きを止めた。

「だめだよ」イーサンが意味ありげに苦笑した。

「今そんなふう^{よほど}にされたら、君にしばらくお預けをさせることになってしまふよ」イーサンは横を向いてすばやくコンドームをつけると彼女の体に覆いかぶさり、両脚の間に膝を入れた。同時にリンディの手首をつかみ、頭の上^{うへ}に上げさせる。

降参したようなかつこうがたまらなく刺激的だった。リンディは体を弓なりにそらせ、下腹を彼の硬くなったものに押しつけた。

「まだだよ、ダーリン。そう急がないで」イーサンが笑う。彼は頭を下の方に下げていき、胸のふくらみを口に含んだ。その瞬間、リンディは体の芯^{しん}まで電流が流れたかのような激しい衝撃を覚え、ベッドの上ではね上がりそうになった。

「イーサン、お願い……お願いよ……」リンディは懇願した。ほかにもう何も考えられない。イーサン

が体を起こし、再び体を重ねてきたとき、リンディは大きく脚を広げ、彼の硬くなった部分が自分のひめやかな場所にあたるように腰を動かした。「今よ、お願い」

「ダーリン、急ぐことはないよ。時間は……」

「だめだわ。もう待てないの！」リンディは息を弾ませた。踵かかとに力を込め、思いきり腰を彼に押しつける。すると驚くほど滑らかに、濡ぬれたイーサンの先端がリンディのなかに入ってきた。最初だけぎこちない痛みを感じたが、体を彼にこすりつけているうちに何も感じなくなり、やがて、それは愛する男性と一つに結ばれた歓びに取って代わった。

「リンディ……大丈夫かい？」イーサンが肘で体を支えながら気遣うようにこちらを見ている。

「私なら大丈夫よ」全身に歓びが広がっていく。リンディはブルーの目をじっと見つめながら誘うようにほほ笑みかけた。「あなたも動いて」

「おおせのとおりに」イーサンがにやりと笑った。リンディの胸は躍った。ちよつと生意気でいたずらっぽい表情は昔から変わらない。彼は唇を熱いキスでふさぎながら、腰をリズムカルに動かし始めた。ベッドがきしむ。これまでに感じたことのない興奮

がわき上がってきた。イーサンの速くなる腰の動きに合わせて一緒に腰を動かすと、興奮がいつそう高まり、快樂の糸がぴんと張りつめてくる。やがて、張りつめた糸は矢が放たれるようにぶつんと切れ、リンディの口からすすり泣きに近い声もれた。

同時に、信じられないほどの歓喜が全身に広がり、リンディの体は震えた。イーサンが激しく腰を突き出しながら、さらに深く彼女を貫き始める。ああ、コンドームをつけなければもつとよかったのに……。心のどこかで誰かがささやいた。

イーサンの体が大きく震え、そのまま覆いかぶさってきた。リンディは顔を横に向け、枕まくらに頭を埋うず

めたイーサンにキスをした。「ありがとう」

「感謝しているのは僕のほうだよ」イーサンの声はまだだけだるそうで、くぐもっていた。「こんなによかったのは……初めてだ」

リンデイの胸が熱くなった。込み上げる涙に目を閉じる。イーサンがそつと体をずらして彼女の隣に横たわり、両腕でリンデイを抱き寄せながら髪をもてあそび始めた。

「これからどうするの？」そうきいたあとに、リンデイの口から大きなあくびがもれた。

「ひと眠りするのさ」イーサンが言った。「それから……第二ラウンドを始めるんだ」

6

土曜日の朝早く、イーサンはリンデイを図書館へ送っていった。彼女はほかの図書館員が出勤してくる前に到着して、仕事の段取りをすませるのが好きだった。昨日休みを取ったから、今日はなおさらその必要がある。昨日は一日じゅうベッドで快樂に溺れた。そしてとうとうイーサンが、これ以上続けられ体じゅうが痛くなると言ってリンデイをシャワーに追い立て、近くの町まで夕食に連れ出してくれた。通用口の鍵かぎを開け、通路を進んでまっすぐ自分のオフィスに入る。ドアを閉めようとしてリンデイが何気なく振り返ると、イーサンがすぐ後ろに続いて入ってきた。

「それじゃあ、今夜またね」彼女は爪先立ちしてお別れのキスをした。

イーサンの喉の奥からくぐもった声もれる。彼は体を引こうとしたリンディを両手で引き寄せ、単なる挨拶以上のキスを返してきた。

「イーサン」リンディが警告した。「私はこれから仕事なの」

「まだ時間があるだろう？」イーサンは何食わぬ顔でほほ笑んでいる。しかし、目にいたずらっぽい光が浮かんでいるのをリンディは見逃さなかった。すばやく向きを変え、机の向こう側に逃げ込む。

イーサンはにやにや笑いながら大股で机に近づいてきた。「イーサン！ だめよ……」

「どうしてだい？」リンディをパソコンデスクの前に追いつめながら、イーサンが甘い声で誘う。「だって、僕たちは相性抜群だろう？」

「でも……ここじゃだめ」ブラウスのボタンに彼の

手が伸び、巧みにはずされていくと、リンディはぎよつとなつて思わず叫んだ。開いたブラウスの内側に、彼の手のひらが滑り込む。彼はレースのキャミソールの上から胸のふくらみを包み込み、親指でその頂をこすり始めた。硬くなった先端から全身に電流のような快感が走り、体の芯がかつと熱くなる。同時に、茂みの奥が温かくなっていく。

リンディは手首をつかんで止めようとしたが、力ではかなわなかった。イーサンが腰を突き出し、自身の体を太腿の合わせ目に押しつけてくると、リンディの口から思わず吐息がもれた。

「外に聞こえるよ」イーサンが笑いながらキスをし、彼女の声を抑えた。片手でスカートをつかみ、そのまま引きずり下ろす。その手は下腹に触れたかと思うと、パンティのなかに滑り込んだ。温かく濡れた場所に触れられて、リンディの膝から力が抜けた。

指先が秘められた場所の奥に隠れていた蕾を見

つけて撫なでると、体がいつそう熱くなり、蜜みつがあふれる。長い指が滑るように入ってきた瞬間、キスでふさがれたリンディの口から悲鳴ともつかないあえぎがもれた。親指が容赦なく蕾を攻め続け、こすり、はじくたびにリンディは彼の腕のなかで身をよじらせた。そのせいで指がいつそう奥深くへ滑り込んでいき、彼女は波のように押し寄せてくる感覚に身を任せた。この快感……。リンディはいつのまにか、リズムカルに腰を動かして始めていた。最初はゆっくり、そしてしだいに激しく、速く……。

快楽が絶頂に達した瞬間、リンディのあえぎ声は叫びに変わった。イーサンがキスでその声をのみ込む。リンディは全身にさざなみのように広がっていく快感に打ち震えながら、肩で大きく息をついた。

リンディが絶頂の歓よろこびに身を任せている間に、イーサンはパンティに滑り込ませていた手を自分のズボンのファスナーに持っていった。リンディが一

緒にファスナーを下げ、下着のなかに指を入れる。リンディの手が硬くすべすべした彼自身をつかむと、イーサンの体は興奮に震えた。

「ああ……」ポケットからコンドームを取り出そうとしていたイーサンが思わずあえぐ。

「早くなかに。お願い」リンディの懇願する声にイーサンはすばやく彼女の下着を下ろし、濡れた先端を茂みにあてがった。リンディが両脚を広げると彼の体の一部が快楽の入り口を探しあてる。たくましい腰が力強い動作で突き出され、奥深くまでいつきに貫かれた瞬間、ふたりの口から歓びの吐息がもれた。リンディはそのままデスクの上に押し倒された。

イーサンが机に肘をつけて体を支えながら覆いかぶさってきた。ヒップを持ち上げられ、リンディはすかさず両脚をイーサンの腰に絡ませた。すぐにリズムカルな動きが始まる。何度も貫かれながらリンディは再び甘美な歓びの絶頂に達した。それを察し

たらしいイーサンがいつそう荒々しく腰を動かすと、低いうなり声とともに全身を震わせ、やがてゆっくり動きを止めた。

ああ、いつまでもこうしていたい。リンディはたくましい肩をつかんだまま歓びの余韻に酔いしれた。イーサンがこのまま町に残ってくれたら……。結婚して一緒に暮らしたら……。

ずっと考えるまいとしてきたことが次々と頭のなかに浮かんでくる。イーサンは、結婚をしたがるタイプの男性だとは思えない。でも、イーサンと結婚したい……。

「リンディ？ いるの？ この請求書にサインをしてほしいんだけど」突然、ドアの向こうから同僚の声が聞こえてきた。

リンディははっとして我に返った。頭が混乱してとつきにどうしていいのかわからない。動くこうにも、イーサンの大きな体があつて身動きがとれない

のだ。「イーサン！」彼女はまだぐったりとしていた。イーサンの肩を力いっぱい押し上げた。「起きてちょうだい！」

イーサンがにやりと笑った。「お礼に何をしてくれるんだい？」

「セックス以外に考えることはないの？」リンディは思いきりイーサンをにらみつけた。同僚がドアを開けて入ってきたら、現場を見られてしまう。彼女は必死で体をよじらせた。「今、行くわ」できるだけ平静を装ってそう口にしたつもりだったが、やはり声はかすれ、いつもと違っていている気がした。

イーサンがゆっくり体を起こし、手を伸ばしてテイッシュを何枚か引き出すと、彼女の太腿の間を伝うものをそっと拭き始めた。リンディは驚いて脚を閉じようとしたが、たくましい腰に押さえ込まれて動きようがなかった。それから彼はそっとパンティを着けてくれた。

一歩下がってリンディの体をまっすぐに立たせる。リンディの頬は真っ赤だった。

手早く後始末をし、服装を整えたイーサンが顔を上げてにやりとした。いつもみたいに目がいたずらっぽく笑っている。「今ごろ顔を赤らめたって、もう遅いんじゃないか？」

「わざと赤らめてるんじゃないわ」押し殺した声でささやく。「私は……こんなことしないもの」

彼は口元をゆがめた。「でも、今、したよ」ブルーの目が彼女の心を見透かすように鋭く光る。

リンディは急に苛立ちを覚えた。「あなたはすぐにこの町から出ていくから気楽だけれど、噂の的になるのは私なのよ」

イーサンの顔から微笑が消えた。ブルーの目が色濃くなり、考え込むように彼女を見る。「君だつて残る必要はないんだよ」

ふたりの間にぎこちない沈黙が流れた。

「もう、行かなくちゃ」話をちゃんと終わらせたかったが、どうしようもなかった。リンディはイーサンが急に遠く感じられた。それにしても、今のはいったいどういう意味だろう？「私が、いい」と言うまでここにいてね」彼女はそれだけ言うどドアの取っ手に手をかけた。

君だつて残る必要はないんだよ

どうしてあんな余計なことを言ったのだろう？

イーサンはカフスボタンをはめ終えると、シルクのネクタイに手を伸ばした。ワイシャツとスーツに合せて色は黒だ。今朝、リンディに言われるまで、今夜が肝心の同窓会だということをイーサンはすっかり忘れていた。

今朝、追い立てられるように図書館の通用口からこっそり出たことを思い出すたびに苦々しい気持ちになる。それに、噂を立てられたくないというリン

デイの言葉も気に入らなかつた。リンデイにとつて自分はなんなんだ？ 人目を忍んでセックスを楽しむための相手なのだろうか？

くやしいが、おそらく答えは「イエス」だ。

リンデイ自身が、最初の晩にはつきりと目的を話してくれたじゃないか。そして、イーサンはその望みをかなえてあげた。しかし計算外だったのは、セックスだけでなく、心も与えてしまったことだ。

ネクタイを結ぶ手が途中で止まつた。そうだ、僕はリンデイを愛している。だからといって、状況は何も変わらないが。僕は今週になつてから彼女を愛し始めたわけではなく、もう何年も愛しているのだ……。隣に住む物静かで美しい少女は、反逆児の顔の奥にあるイーサン自身を見つめ続けてくれていた。「好きだ」と打ち明けても、リンデイは戸惑うに違いない。高校のころは、断られるのが怖くて打ち明けられなかつた。卒業してすぐに町を出て以来、多

くの女性とつき合つたが、リンデイほど心引かれる女性はい人もいなかった。いつも、心のどこかで彼女を追い求めていたせいだろうか？

これからどうしたらいいのだろうか？ 僕の気持ちにはつきりしている。リンデイと結婚したい。

イーサンは大きく息を吸い込み、声に出して言うてみた。「彼女と結婚したい」

リンデイはまともに取り合つてくれるだろうか？ ここ数日の様子からすると、彼女もなんらかの感情を抱いている気はする。そうでなければ、ベッドであれだけ激しく応えはしないだろう。愛か？ 僕を愛している、などということがありうるだろうか？ たとえリンデイが僕を愛してくれていても、結婚をして一緒に町を出ようと云つたら、どう答えるだろうか？ この小さな町に根を下ろして生きてきた彼女には、思い出があまりすぎるのかもしれない。だが新しい人生のスタートも必要なはずだ。ふたりで世

界じゆうを旅行してまわり、ニューヨークやパリを案内して、行く先々でプレゼントを買ってあげたい。

彼女はなぜ自分の美しさに気づかないんだ？ イ

ーサンはもどかしさを覚えた。たしかに高校時代は物静かでまじめだったから、自分の魅力に気づいていなかったのかも知れない。しかし、いちばんの原因は例の牧師だろう。婚約者に裏切られてすっかり自信をなくしてしまったのに違いない。

今、愛を告白して結婚を申し込んで、相手にしてもらえない気がする。せいぜい、冗談はよしてと言われるだけだ。

いきなり結婚を持ち出すより、一歩ずつ進めてみよう。まずはニューヨークに連れていき、一緒に旅行をするところから始めよう。自信を取り戻させるのだ。そうしたら彼が何年も——これまでの人生の半分近く、リンディに思いを寄せていたことを信じてもらえるかもしれない。

7

同窓会に向かうために、イーサンはリンディを迎えに行つた。思つたとおり、支度はできているらしい。ドアをノックすると、居間の窓越しに動く人影が見え、玄関へ近づいてきた。だが、ドアが開いて現れたのは初めて見る女性だった。

イーサンの目は女性に引きつけられた。思わず口をぽかんと開けそうになる。

「イーサン？」女性の手を伸ばして彼の腕に触れた。「大丈夫？」

「ああ、もちろん。大丈夫だよ」イーサンは家のかなかに入ると、再びしげしげと相手を見た。「いったいどうしたんだい？」

相手の顔がたちまち曇った。「気分転換に、少しイメージチェンジを試してみたの。ドレスも新たに買ったんだけど、似合わないならほかの……」

「いや！」イーサンが奥へ入っていきこうとしたリンディの肘をつかんだ。「ごめん、そういうつもりで言ったんじゃないんだ。本当だよ。ものすごく似合っている。ただ、びっくりしただけさ。誰かが僕のリンディを誘拐して、代わりにセクシーベイビーを置いていったのかと思ったんだ」

イーサンはもう一度じっくりとリンディを見た。なんてセクシーなドレスだろう！ 黒のストラップレスのミニ・ドレスは華奢な体のラインにぴったり沿い、むき出しの肩がなまめかしい。ふくよかな胸元は、もしかしたら寄せ上げ効果のあるブラジャーでもつけているのだろうか？ それでもいい。魅力的であれば、誰もそんなことをかまうものか。

ハイヒールをはいているせいで脚がいつそう長く

見え、頭はイーサンの目の高さ近くにあった。肌はまるで陶器人形のように輝いているが、目だけが陰影を帯び、謎めいた光を放っていた。なぜだろう……そうだ！ 眼鏡をかけていないせいで。「コンタクトレンズにしたのかい？」イーサンが尋ねた。

「ええ、一日じゅうつけるのは難しいんだけど、今夜だけなら大丈夫だわ」うなずいた拍子に髪が肩のあたりで軽やかに揺れる。イーサンはきれいにセットされた髪をそつと撫でた。どうやってカールさせたのかは知らないが、腰まである髪は輝いている。「ああ、なんて美しいんだ」イーサンは感嘆の声をあげた。「宝石か何か、プレゼントを持ってくるべきだった」もし結婚したら、いつも宝石を贈りたい。リンディは笑いながら、玄関ホールのテーブルから小さな黒いバッグを取り上げた。「それじゃあ、今回は特別に許してあげるわ」

イーサンはスポーツカーの助手席のドアを開け、

リンディを乗せた。ニューヨークではほとんど運転する機会がないが、今回の帰省中に久しぶりのドライブを楽しんでいた。

同窓会の会場までの道中、ふたりはあまり口をきかなかつたが、到着するとイーサンが先に降りて助手席のドアを開けた。差し出された手を取りながら、リンディがにつこりとほほ笑みかける。イーサンは思わずかがんで唇にキスをした。「あとでドレスを脱がせるのが楽しみだよ」

「脱がせてもらうのが楽しみだよ」

「リンディ……明日、ニューヨークに戻らなくちゃならないんだ」イーサンはふいにあせりを感じ、口にした。「一緒に来ないか?」

彼女の目が濃さを増し、無表情になった。ほっそりした顔もこわばっている。「ニューヨークに?」

「ああ、とりあえずね」イーサンが緊張をごまかすために早口で言う。「急いで家を片付けて荷物を運

び入れるから、僕の家と一緒に暮らさないか。そのあと、一週間くらいパリに行こうかと思っっているんだ。どうだい?」

リンディが躊躇ちゆうちゆうしているのがわかった。

イーサンは息をつめて返事を待った。

おもむろにリンディは首を横に振った。イーサンの心はどん底に突き落とされ、粉々に砕けていった。「イーサン、私にはそういう生活は向かないわ。ニューヨークにいても惨めになるだけ。パリは楽しそうだけれど、そんなに長く図書館の仕事を休めないもの。それに、人になんて噂うわさされるか……」

「ああ、そうだったな」イーサンは吐き捨てるように言った。「セックスするのはいいが、一緒のところを人に見られたくないんだっただね。そんな僕と、今夜、同窓会に出てもいいのかい?」

冷やかな口調にリンディがひるんだ。

ふたりの間に重苦しい沈黙が流れる。

どのくらいの時間、そうしていただろう。やがてリンデイが静かに口を開いた。目に涙を浮かべている。「イーサン、やめて」彼女はイーサンの顔を両手ではさみ、懇願するように言った。「せつかくの晩を台無しにしないで。あとひと晩、夢のような時間を過ぎましょうよ。話はあとでもできるわ。そのとき、すべてを話してちょうだい」

イーサンはこわばった顔でリンデイを見た。そうだ、僕はふられたのだ。ふられたのなら、もうどうしようもない。ここで怒りをぶちまけたところで、互いに気まずくなるだけだ。それよりリンデイの言ったとおり、最後の晩を楽しく過ごし、後くされなく立ち去ろう。せめて引き際だけは、かっこよく決めたい。イーサンは頬にかかったリンデイの手に唇を押しあてた。「わかったよ」

「ありがとう」リンデイが小声でささやき、目を閉じる。彼が一人でさっさと会場に入っていくものと

思っているのだろう。イーサンはリンデイの手を握り、エスコートして会場に向かった。

大きなホールに足を踏み入れたとたん、リンデイの予想したとおり、たくさんの人が握手の手を差し伸べながら近づいてきた。彼女が「司書のリンデイ」だと気づくと、誰もが驚いた。さらにエスコートの相手が誰なのかに気づいて、再び目を丸くする。リンデイは顔に微笑を張りつけ、歯をぐつと食いしばって胸の痛みをこらえた。イーサンとの最後の晩を台無しにしたくない。

リンデイが小さな勝利の瞬間を感じたのは、マンデイ・ブリッグズと夫となった牧師の姿を見つけたときだった。ふたりとも啞然あざとした顔で彼女を見つめている。リンデイがにこやかに手を振り、イーサンの肩にもたれかかると、ふたりは密会の現場を見つかったときのよう慌てて顔を背けた。

何気なく振り返ったイーサンにもこそそ退散す

るふたりの姿が見えたらしく、それがマンディたちだと彼は気づいた。あとを追いかけようとしたが、リンディが慌てて腕をつかんだ。「いいのよ。そのかわり、一度だけ私の腰をしつかりと抱いて一緒に踊ってくれないかしら？ 仕返しはそれで十分よ。きつと彼は、私をベッドに誘っていたら……と一生思い続けるに違いないから」

「あんなやつには想像もできないだろう」イーサンがリンディを抱き寄せ、耳元にキスをした。「あいつが声をかけてきたら、この僕が殺してやる」

殺人を犯したら、ベル・ギャップの町の刑務所に入ることになるのよ……。しかしリンディは、あえて何も言わなかった。人を殺したりするわけがないことくらい、お互いにわかっている。リンディは胸が締めつけられそうになった。

彼の口から「愛している」という言葉が聞けたら……。結婚してほしいなどと高望みはしない。だが、

“ニューヨークにいても惨めになるだけ”というのは本心だった。ただの遊び相手はいやだもの。恋人たちの集うパリには絶対に行きたくない。一緒にいたい気持ちはあるが、やはり愛されないまま肉体だけの関係が続けるのはどうしてもいやだった。

ふたりはイーサンの旧友たちと一緒に夕食の席についた。やがて幹事が、趣向を凝らしたいろいろな賞に選ばれた人たちの名前を読み上げ始めた。リンディは“大変身賞”を獲得した。

食事のあとで、再びふたりはダンスフロアに出た。いった。イーサンの腕に抱かれながら、彼の巧みなリードで踊る。息がぴたりで、ふたりはまるで長年のカップルのようだった。リンディが肩に顔をのせると、イーサンがこめかみにそっと唇を押しあてた。リンディの胸はいまにも張り裂けそうになった。ああ、イーサン！ ただあなたから愛されたいのに……。

8

翌朝目覚めたとき、すでにイーサンの姿は消えていた。

リンデイはひと晩じゆう、たくましい腕のなかで眠った。一度背後から抱き寄せられて目が覚めたときは、イーサンがなかに入ってくるころだった。右脚をイーサンのたくましい太腿に絡め、腰を押しつけながら彼の硬くなった部分を迎え入れる。イーサンはリンデイの腰を手のひらで引き寄せながら、体をゆっくりと動かし始めた。

二度目は明け方近くだった。イーサンが仰向けになつてリンデイを上へのせ、胸のふくらみを両手で包みながら腰を動かすように言った。挑発的なささ

やきがリンデイの興奮をそそり、ふたりは激しく燃え上がりながら歓喜に上りつめた。胸にもたれて快樂の余韻に浸るリンデイを抱き寄せながら、イーサンはいつまでも長い髪を撫で続けた。

そして……いつのまにかまたうとうとしてしまったのに違いない。彼女が眠っている間に、イーサンは静かに出ていった。

寝返りを打つて時計を見る。日曜日の午前十時。起きる理由は見つからなかった。彼女は枕に顔を埋め、嗚咽をもらした。

月曜日。けたたましく鳴り始めた時計のつまみを乱暴に押すと、リンデイはのろのろと起き上がった。仕事に行かなくては。仕事——それだけが、リンデイに残されたものだった。

身支度を整えて朝食を食べ、図書館までの道を歩き始める。リンデイの頭のなかに、図書館のカウン

ターに座って代わり映えしない一生を終える自分の姿が、まるで白黒映画を観るみように映し出された。

ふいにリンディのなかで何かがぶつんと切れた。

そんな人生には耐えられない。司書リンディのま
ま終わるのはいやだ。イーサンは私を「セクシーベ
イビー」と呼んでくれた。私には彼が必要だ。イー
サンを愛し、一緒に暮らしたい。

私はイーサンを愛している。しかし彼が去った今、
一緒に暮らしたいという願いはもうかなわない……
私が生き方を変えないかぎり。

イーサンと一緒にニューヨークに行こうと言って
くれた。ベル・ギャップの町を離れてほかの場所
で暮らすことなど、想像したこともない。人生を変え
るのが、怖いわけではない。ただ、自分にそんなこ
とができるはずはないと思ひ込んでいたのだ。だけ
どイーサンが去ったこの町はひどく空虚だ。彼のい
ないこの町には、もうなんの未練もない。

愛されていないからどうだというの？　ここに残
って孤独な人生を送るか、彼と一緒に時間を楽しむ
か、選択肢は二つに一つだ。イーサンと一緒にしば
らく暮らしたあとで舞い戻ってきたら、町の人々は
あれこれ噂うわさするだろう。図書館の仕事には戻れな
いかもしれない。だけど、それがどうしたとい
うの？　楽しい出があればいいのではないだろう
か？　できるだけのことをしたと、私が納得できれ
ばいいのだ。

もしこの機会を逃したら、一生後悔するに違いな
い。今追いかければ、彼と一緒に過ごせる。ニュー
ヨークに着いたら「愛している」と告げよう。奇跡
が起きて、彼もいつか私を愛してくれるときがくる
かもしれない……。

リンディはくると踵かかとを返すと、町の広場に面
して立つ旅行代理店に向かった。

午後になって、図書館の館長が貸し出しデスクに

いたリンデイのところにもつすぐやってきた。不機嫌な表情をしている。「リンデイ、辞めるときは二週間前に言ってもらわないと推薦状は書いてあげられないんだよ。それに、すぐに君の後任を見つめるのは大変なんだ」

「わかりました。推薦状は結構ですわ。とにかく、今日かぎりで辞めさせていたきたいんです」

「なんて無責任な……」瘦せて頭の薄くなつた館長がぶつぶつ言う。しかし、リンデイの耳には何も届いていなかった。図書館の入り口のドアが開いて、背が高くてたくましい男性が入ってきたのだ。ブロードの髪にブルーの目は……。

リンデイがかけ出し、イーサンに飛びつく。ちょうど一週間前にしたように、イーサンがその体を抱き止めた。彼女は首に両手をまわし、唇を唇を押しつけた。たちまち、図書館じゅうからひそひそとした声がわき上がる。

イーサンがリンデイに熱いキスを返す。甘美なキスに、リンデイの頭はくらくらした。これでいいのよ……これで……。

「イーサン！ いったい……」喉に熱いものが込み上げ、リンデイは咳払いをしてから先を続けた。

「ここで何をしているの？」

「君に会いに来たんだよ」

「私もあなたに会いに行くところだったの。ニューヨークにね」彼女はポケットから航空券を取り出し、相手の目の前でひらひらさせた。「イーサン……」

「リンデイ……」同時にイーサンが言った。

「君から……」

「私から……」

ふたりは顔を見合わせ、ぎこちなく笑った。やがて笑い声とぎれた。

「私……」リンデイが再び口を開いた。「あなたと一緒にいたい。図書館は今日で辞めることにした

わ。あなたについて、ニューヨークでもパリでも、どこへでも行くつもり。あなたが置いてくれるかぎり、一緒に暮らすわ。イーサン、あなたを愛しているの。あなたのいないこの町に残るより、いつか孤独になってもいいから、今、あなたと一緒にいたい。ふたりの思い出がほしいの。愛されていなくても、思い出を作るのはかまわないでしょう？」リンディはそこで言葉を切り、相手の反応を待った。しかし、彼は眉一つ動かさなかった。「これで……私の話はおしまいよ」

「それじゃあ、今度は僕の番だ」

イーサンの目に奇妙な光が浮かんだ。リンディは身構えた。六年生のときに、ぶらんこに乗る彼女の背中を押してくれたあとに、前にまわってスカートがめくれ上がる光景を楽しんだときと同じ目をしている。あのときリンディは、ぶらんこが上がるたびに首までめくれ上がるスカートを必死で押さえたも

のだった……。

「子供のとき、隣にすぐかわいい女の子が住んでいたんだ。幼なじみだ。彼女は高校に入るともつとすてきになった。でもすぐ頭がよくて、僕がどんなに冒険を企てても無視されっぱなしだった。正直いつて、すっかり弱気になったよ。僕が町を出るとき、彼女はちょうど大学に進学するところで、僕の存在などどうでもいいみただった」

イーサンがそこで言葉を切り、リンディの頬を伝う大粒の涙をそつと手で拭^ぬった。

「それ以来、何年も会わなかったけれど、一日も忘れたことはなかったんだ。一度だけ、母の葬儀のために帰省したとき会ったが、彼女はますます魅力的な女性になっていたよ。僕の心にはいつも彼女がいた。つき合った女性はみんな、憤慨していたよ」

笑いとも嗚咽ともつかない声がリンディの口からもれる。

「同窓会の通知を受け取ったとき、彼女に会えるかもしれないと思つて出席することに決めたんだ。帰つてみると、彼女はまた町に住んでいて、独身だった」イーサンは顔を寄せ、額を合わせながらリンデイの目をのぞき込んだ。「彼女に対する愛は募るばかりだった。彼女も同じ気持ちだったらと願わずにはいられなかったよ。でも、愛を告白し、結婚を申し込む勇気がなくて、少しずつアプローチをすることにしたんだ。とりあえず一緒に住んだり、旅行に行つたりするところから始めようかね」

イーサンが一瞬目を閉じる。

「だが、見事に断られ、僕の心は碎けてしまった」彼はそこで一步下がった。「そして、愚かにも町を去つてしまった。もう少しで彼女を失うところだったんだよ。どうしても彼女にすべてを打ち明けなくてはならないと気づいて、戻ってきたのさ」

イーサンはポケットから銀色のリボンのついた白

い小箱を取り出し、ひざまずいた。

背後でいつせいに息をのむ気配がする。図書館じゆうがしんと静まり返った。

「リンデイ・メルトン、愛しているよ」イーサンが言った。「僕と結婚してほしい」

「ええ、喜んで！」

イーサンが小箱を開けて指輪を取り出し、リンデイの薬指にダイヤモンドの指輪を滑らせた。

背後で女性の声が聞こえる。「メルヴィン、どうして私にもあんなふうにしてくれなかったの？」

二時間後、ふたりは再びイーサンのベッドのなかにいた。「家はそのまま残しておこうと思うんだ」イーサンが言った。「僕たちが育つたところを、子供たちにも知ってもらいたいからね」

リンデイが危うくシャンペンにむせそうになった。「子供たち？ 話がずいぶん飛躍するのね」

この際、正直に告白したほうがいいとイーサンは

考えた。前回、すべてを打ち明けなかったせいで、危うくリンディを失うところだったのだから。「まだ何も話し合っていないが、僕としては、どうしても子供が欲しいんだ。何人も欲しくないと君が言うのなら、一人でもいい」

リンディの顔にこぼれんばかりの笑みが浮かんだ。「まず一人産んで、それから、その先どうするか考えましょう。でも四人まで、というのはどう？」

「四人か。ちょうどよさそうだね」イーサンがリンディの唇にキスをする。「君が子供好きでよかったよ」

リンディがいぶかしげな顔になった。「どうして？」

「実をいうと、日曜の朝、二回とも避妊をしなかったんだ」

「まあ」リンディが啞然^{あぜん}とした顔になった。

「万が一に備えて、最後の手段を使うしかなかった

のさ」イーサンが弁解がましく言う。「もし妊娠したら、君も僕と結婚せざるを得なくなる。そうすれば遅かれ早かれ、僕の魅力に気づいて愛してくれるんじゃないかと思ったんだ」

「もうとつくに愛していたのよ」リンディが苦笑した。「鈍いあなたが気づかなかっただけ」

「気持ち隠すなんて……君のほうが意地悪なんだよ」イーサンがすかさず応酬した。

反論しようとするリンディの体にイーサンが覆いかぶさり、唇をふさいだ。イーサンの硬い部分が奥深くに入り込み、ぴったり体が重なる。彼女は両脚を開いて腰に絡め、体を動かした。

指と指を絡めながらイーサンが唇に熱くキスをする。「リンディ、愛しているよ。これから一生、毎日、愛を態度で示すと約束するよ」

その言葉どおり、イーサンはさっそく、約束を実行し始めた。

Fin.

